

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」—共産主義思想をめぐって—

マルクス思想の入門書的にとらえられている『共産党宣言』（岩波文庫版）は、次の言葉から始まります。「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である。ふるいヨーロッパのすべての強国は、この幽霊を退治しようとして神聖な同盟を結んでいる。法皇とツァー、メッテルニヒとギゾーフランス急進派とドイツ官憲。」37P(本文・冒頭)

尤も、大月書店の版（国民文庫版）は「妖怪」になっています。実は、この文のモチーフが浮かんだ時点で、二つの文庫を一寸比較しながら読んで、読書メモを残しました。それは189号で掲載するのですが、こここのところを先取り的に論及してみます。

そもそも、社会主義の定立に失敗した政権を「社会主義国家」としてとらえている間違い

共産主義を批判するひとたち、そしてそれに加わるひとたちは、ロシアを「社会主義国家」としてとらえ、それが1990年を前後して崩壊したのだから、マルクスの「共産主義社会への途」という理論が破綻したのだと主張します。

ですが、そもそも前提が間違っているのです。ロシアは労農ソヴィエト独裁までたどり着いたのですが、すぐに党の独裁に陥り、レーニンが念じた世界革命への連動は起こらず、レーニンがこれは国家資本主義だと押さえた、「新経済政策」（ネップ）を取り入れます。それを、スターリンは、「一国でも社会主義建設が可能だ」と、社会主義国家が定立したと主張したのです。

そもそも、スターリンは、権威依存的にマルクス・レーニン主義を唱えたのですが、レーニンの現実主義は、マルクスの「労働者の解放は労働者階級自身の仕事であらねばならない」「労働者階級は、既成の国家機関をそのまま奪いとて、それを自分自身の目的のために動かすことはできない」を踏み外したのです。さらに、スターリンがそれを倍加し、それで、アーレントのいう「全体主義国家」に陥ったのです。

「幽霊」か「妖怪」か？

今回、その「全体主義国家」に対する批判としての「幽霊の正体見たり枯れ尾花」（「共産主義」の正体見たり「国家資本主義」、「共産主義」の正体見たり「全体主義」）という句が浮かび（こここの‘共産主義’には括弧を付けています）、マルクスがそもそも‘共産主義’ということをどうとらえていたのか、そしてどう変遷していったかを、検証しようという念いが湧いてきたからです。この「幽霊」という言葉は岩波文庫版で、国民文庫では、「妖怪」になっています。「幽霊」は「死者の亡霊」というニュアンスなので、この『宣言』が書かれた当時には「妖怪」の方が内容的に合っているのですが、現在的に（「社会主義国家」ととらえられていた政権が崩壊した後、そもそもそれも国家資本主義でしかなかったことを）とらえ返すと、「幽霊」という言葉の方が鋭切にとらえられます。

「マルクス葬送」が何を意味するのか？

さて、1990年を前後してソヴィエト社会主义共和国連邦が崩壊し、東欧「社会主義国家」

も瓦解しました。その中で、マルクス葬送ということが広まっていきました。左派的な知識人が、「マルクス（主義）は死んだ」という合唱に加わり出しました。「資本主義はなくならない」とか「市場経済はなくならない」という主張を前提にして論を展開するとしたのです。これは悲喜劇です。わたしは反差別論を軸にいろいろ考えているのですが、被差別の色々な課題で、本を読んでいると、「マルクス（主義）は死んだ」というところに嵌まり込んだひとの論攷は、その被差別の問題で、事が資本主義社会の矛盾から来ていることに達すると、問題の掘り下げを止めてしまうのです。で、疑問符を出して、それ以上の分析を止めてしまうのです。問題は、そこからの分析することなのにも拘わらず、です。マルクスの『資本論』は資本主義社会の分析の基調なのです。それを葬送してしまったら、資本主義社会は差別で成り立っている社会ですから、少なくとも差別の問題に関する論考が止まってしまうのです。

マルクス葬送と「幽霊」

マルクス葬送は、マルクスを幽霊にしてしまつたのだと、押さえ得ます。厳密にいうと、マルクスではなくて、「マルクス主義」ということなのですが、わたしは反差別論を展開している立場で、「〇〇主義」ということは、それを肯定的にとらえるとき、ひとを個人崇拜する、カリスマ的に持ち上げるようになっているので、「主義」を忌避します（ただ、ドグマ（臆断）になっていると否定的ニュアンスのときには用います）。それで、「マルクス主義」ならずマルクスの思想までも葬ったのですが、マルクスをその思想を幽霊にしてしまったのです。それで何が起きているのでしょうか？

出口なき社会の出口を見つけるために—マルクスの思想継承・発展へ向けて

今、極右高市政権が発足し、何か大手メディアは歓迎的なムードを醸し出しているのですが、一部インターネットメディアでの的確な分析もしています。ですが、それでも八方塞がりの批判なのです。何故かととらえると、この資本主義社会を前提にして、どうしたら、いろいろな問題を解決できるかという議論をしているからです。

資本主義は「帝国主義」時代からポストコロニアリズムを経て、グローバリゼーションの時代に突入し、それが世界を覆った時点で、もうその終わりが始まったのです。ですが、その「墓掘り人」がいなくなったのです。それで、戦争とファシズム的なところでスクランブル・アンド・ビルトを繰り返し、繰り返していくしかないのです。

グローバリゼーションの意味を理解していないひとが、「経済成長戦略」などと言っているのですが、そもそもグローバリゼーションが行き渡り、継続的本源的蓄積が先進資本主義中枢国の中での収奪の強化に向かっているときに、経済成長は軍事産業しかなくなるのです。それは福祉の切り捨て政策にも繋がらざるを得ないので。イノベーションで、わずかに成長が見込まれますが、「先進資本主義中枢国の中での収奪の強化」で生きていくのがやっとで、そんな需要さえ生まれ難くなっているのです。

例えば、最先端の技術、生成AIの話を持ち出します。そもそも今の政治は、ひとがきちんと物事を考えないように誘導しています。で、そもそも生成AIを使おうという意識

性や財政的根拠が生まれ得ません。更に、利権紛れの政治家たちを政治から排除して生成AIに任せた方が余程良いという意見も考えられます。例えば、きちんとこれまでの情報をインプットして、生成AIに「矛盾のない社会を作るにはどうすればいいですか？」と問うと、「資本主義を止めて、共産主義社会を実現するしかありません」という答えが返ってくるとわたしは思うのですが、勿論今の社会の支配層がそんな生成AIの存在を許すはずはないのです。

兎も角、戦争とファシズムの蠢動から始動の危機に陥っている時に、今必要になっているのは、「葬送」が叫ばれたマルクスの思想のとらえ返しと、更なる対話だとわたしは念っています。

(み)

(「反差別原論」への断章」(112) としても)